

《復讐》の文学——萩原朔太郎研究——

その多角的研究

《復讐》の文学 8

(1) ド・キャサラスから辻潤へ 8

(2) 復讐の意識と対象 19

(3) 叛逆精神と「ただ一步」 30

(4) 恭次郎・重治との一致点 42

(5) 〈否定〉の意味 54

《復讐》補遺 69

《復讐》をめぐる年表 77

萩原朔太郎の《祈り》 81

《母》としての朔太郎 103

『氷島』の評価をめぐる 116

〈望郷〉と「日本への回帰」 122

萩原朔太郎と芥川龍之介——アフォーリズムについて——

萩原朔太郎と短歌	140
萩原朔太郎と乃木大将	147
萩原朔太郎の《愛恋》	158
〔付〕 1 朔太郎の《エレナ》	187
〔付〕 2 幻影の恋人	190
朔太郎雑記——随想・書評エトセトラ——	
萩原朔太郎の「新年」	198
朔太郎の《汽車》	203
萩原朔太郎の《兄弟》——「天性」誌のこと——	205
朔太郎の「スールズ」	209
朔太郎の伝記のこと	213
大岡信『萩原朔太郎』	215
磯田光一『萩原朔太郎』	218
朔太郎論あれこれ	220
渋谷国忠『萩原朔太郎』	224

伊藤信吉『烈風の中に立ちて——萩原朔太郎と萩原恭次郎』

227

二冊の『萩原朔太郎』

229

### 対談による朔太郎論

朔太郎——その柔構造の魅力——〔対談者〓小川和佑〕

234

萩原朔太郎略年譜

260

あとがき

266

## 《復讐》の文学

(1) ド・キャサラスから辻潤へ

……

われは指にすどく研げるナイフをもち

葉桜のころ

さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

右の詩句で結ばれる「公園の椅子」を、萩原朔太郎が発表したのは、大正十四年。「日本詩人」六月号の誌上であった。

「復讐」というまがまがしい言葉は、〈郷土望景詩〉なる甘ずっぱい懐旧の情緒を誘うタイトルで一括されるには、いささか生臭すぎる（「公園の椅子」は、詩集『純情小曲集』の〈郷土望景詩〉の中に配された）。

「いかなれば故郷のひとのわれに辛く……」「われを嘲けりわらふ声は野山にみち……」「ああ生れたる故郷の土を踏み去れよ」などの表現のつまかさねから強化される意味——この「復讐」の意味は、当然、作者「われ」につれなくあたった故郷のひとびとへの、何らかの復讐にちがいない。だが、そのように狭く限定するには、この言葉は複雑なひびきを帯びすぎる。

年譜の大正十四年を見る。「二月、上毛マンドリン倶楽部により〈萩原朔太郎上京送別演奏会〉が催され

る。妻子を伴って上京。府下大井町六一七〇に住む」とある。詩人は四十歳である。すでに九年前「月に吠える」を刊行、さらに『新しき欲情』『青猫』『蝶を夢む』などを、つきつきに東京の一流出版社から出し、地元ではマンドリン倶楽部のほかに、「文芸座談会」と称する講座の指導もしていた朔太郎だった。「かくばかり／つれなきもの」との一面は、現実にあつたにしても、それが故郷のすべてではなかったはずだ。若き詩人・芸術家たちには、ずいぶん敬慕されていて（その中には萩原恭次郎もいた）、地元の新聞にもたびたび朔太郎に関する記事が出たりしていたから、「復讐」を誓うほどの苛酷な現実はなかつただろう——と考えるのが、日常的常識的理解ではないか。

しかし詩人の内面では、そうではなかった。故郷の敷島公園の詩碑にもなつたあの詩「帰郷」の、傍書を「昭和四年の冬、妻と難別し……」とし、事実としての〈夏〉を、当人が平然と〈冬〉に変えた、そのような心情的真実は、常識をたやすくつき崩す。故郷「前橋」という狭い現実的意味を離れて、また、公園「敷島公園」という貧しい限定的舞台をとっぱらって、もつと自由に「公園の椅子」を読みなおすことはできないか。第一、詩そのものには、「遠き越後の山」の部分のをのぞけば、公園にも故郷にも固有名詞が付いていないのだから。

その後の朔太郎の心情と思想のおもむくところを見れば、大正十四年の時点から大きくジャンプして、「復讐」は故郷「前橋を離れもつと巨視的な生のひろがりの中で、企まれてしかるべき様相を帯びるはずだ。つまり、故郷を（「生れたる故郷」を）、たとえば高村光太郎における「根付の国」のような意識の対象として掴みなおすことは、はたして暴力的なことかどうか。